

靈界物語三神系時代別活動表説明書

昭和二十六年十二月二十八日改訂

木庭次守 謹編

目次

- 一 天地判別と主宰神決定
- 二 国祖の神政より御隠退まで
- 三 盤古大神の神政
- 四 大洪水と天津神の神政
- 五 黄泉比良坂の戦より岩戸開きまで
- 六 天の岩戸開き後
- 七 ハルナ言向軍

- (1) 黄金姫
- (2) 照国別
- (3) 玉国別
- (4) 冷国別
- (5) 初稚姫
- (6) 結論

○ 註

本書は昭和廿九年二月十五日より三日間の大本茨城主会第九回神書
研修会の為にプリントしたものであります。
本文は灵界物語を文章のまゝに拜讀して其中心となつた三つの神系
の系統の時代別に亘る活動を明らかにしたものであります。

一 天地剖判と主宰神決定

天之御中主大神(一名大國常立尊) 高皇產靈大神 神皇產靈大神は無限絶對
無始無終の神力を發揮して、大宇宙を創造し給ひ、我宇宙に大國常立尊の分灵
を下して、修理固成の神業を命じ給うた。神命を遵奉して國祖國常立尊(一名國
治其命)は豊饗野尊(一名豊國姬命)を補佐神として天地を剖判し太陽太陰星辰を
創造し給うた。
而して太陽の灵界は伊邪那岐尊、其現界を撞の大神(天照大御神)が主宰し給ひ
太陰の灵界は伊邪那美尊、其現界は月夜見尊之を主宰し給うた。而して大地の
灵界は國祖自ら主宰し給ひ、其現界(大海原、物積界)は日の大神(伊邪那岐尊)と
國祖の命によりて素盞鳴尊が主宰し給うた。(抄二「九」三。三。抄三「三」)

二 國祖の神政より御隠退まで

茲に國祖は、豊國姬命を内助の役として、地上神界を至喜至樂の天國ならし
めんとして神政を開き給ふ事となつた。
先づ稚稚君命を生み給うて神政の司となし、大八洲彦命を天使長兼宰相として
聖地エルサレム(現今のトルコのエルセラム)の地の高天原龍宮城に神勢と神政を
開き給うた。

然るに日の大神の直系にして、太陽界より伊弉那岐尊の御油断に由りて手の2
俣より潜り出で、現今の支那の北方に降誕したる温厚無比の正神、盤古大神塩
長彦命を擁立して國祖を隱退せしめ、盤古大神を地上神界の総統神たらしめん
とする一派を生じた。(抄一「三九、四〇」)(抄一「三三」)

盤古大神の肉身の子なる八王大神常杵彦命は、稚姫君命の才三女常杵姫命を
妻神として、常杵國(北米大陸)に居を定めて居た。(四〇卷「總説」)

一方に天王星より地上(常杵國)に降誕したる豪勇の神、自在天神大國彦
命(神典にては大國主神)の一派があつた。

地の一方には天足彦、胞場姫の体主灵従の行動の結果邪気凝りて、八頭八尾
の大蛇(ウラル山)、金毛九尾白面の惡狐(印度青雲山)、六面八臂の邪鬼(エダヤ)
の三種の惡灵が発生した。

常杵彦命には八頭八尾の大蛇憑依して之を守護し、常杵姫命には金毛九尾の
惡狐が憑依して守護し、自在天神には六面八臂の邪鬼が憑依して守護して居
た。國常立尊は灵主体従(ひのもと)で、盤古大神は体主灵従(われよし)、自在
天神は力主体従(つよいものがち)である。

扱て常杵彦命は國祖隱退せしむる計畫の謀主となり、常杵姫命と俱に自在
天の力をかりて、常に應軍をして、國祖大神を始め其從神を非常に惱ましたの
である。

國祖は茲に豊國姫命と圖り天道別命と俱に天地の律法を制定し、天の御三體

の大神様の御許しを戴いて、天上地上に宣傳し給うた。即ち國祖は神命により
太陽界に使神となり、日天使國治立命と稱され、豊國姫命は月天使國大立命と
名づけられ、且日天使の神業を國道姫命に月天使の神業を豊國姫命に委任され
た。(抄一「三四、四一」)

國祖大神は、天上地上に天地の律法を宣傳する管掌の神として、十六神將を天
使に任じ宣傳を命じ給うた。

此の時稚姫君命は夫婦の道を誤り、律法の犧牲となつて幽界に下られたので
ある(抄一「三五」)。

國祖大神は、邪神の憑依せる常杵彦命、常杵姫命、大國彦命の行動によりて
地上の混乱するを憂慮し給ひ、大白星より下りし十二個の玉を國魂として、各
界の各地に配置し、守護神として八頭神を任命し、其の主權者として、八王神
を十六天使の内より十二柱を選んで配置し給うた。(抄一「四三」)

然るに盤古大神系たる常杵彦一派は大國彦命と俱に八王神八頭神を操縦し、
終に聖地の宮殿を破る等の暴舉に及び、大八洲彦命以下の天使は天地の律法を
己むなく破りて、配所を隱退さるゝに至つた。(抄一「四三及至五」)

加ふるに邪神の憑依せる盤古系と自在天神系の神々の暴動は遂に天使長及
天使を更送すること教團に及んだ。(大八洲彦命、高照姫命、澤田彦命、廣宗彦命)
然るに國、大神の至仁至愛の神慮に流石の惡神も感泣悔悟して、常杵彦命の如
きは八王大神の名稱を全廢し、天使八王神を拜命し常杵國の守護職となつた。

然るに桃上彦命の失政により、遂に常杵彦命は国祖の神勅によりて、天使長となつて神政に従事した。(抄二「一」)。

常杵彦命没し其子高月彦命天使長となり、常杵姫命の後を承けて、長女初花姫命龍宮城の主宰神となり、常杵彦命常杵姫命と改名するや、常杵彦命には八頭八尾の大蛇憑依し常杵姫命には金毛九尾の悪狐憑依して守護し、遂に国祖大神に迫りて八王大神の稱号を獲得し、加ふるに正しき神々を、根の国に退去せしめ、其上望外の大野心を起し、天の日の若宮にます御三体の大神に直願して国祖大神を根の国(幽界)に退去せしめた。されど其の精霊は地上の神界なるエルサレムの東北、七五三(巨の秀妻国(我日本国)にとどめさせたまうた。豊国姫命も夫神に殉じて聖地より西南の国土へ退去し給うた。茲に良の金神、坤の金神の名稱が起つたのである(抄二「五乃至二」)。

三 盤古大神の神政

茲に八王大神常杵彦命は多年の宿望成就して、天の大神の命を受け聖地エルサレムに盤古大神を奉じて、地上神界の総統神と仰ぎ自らは神政総攬の權を握つてゐた。然るに温厚篤實にして至誠至美なる盤古大神のエルサレムの宮殿に居ますことに何となく窮寇を感じ、エデンの園に宮殿を造りて之を遷し体よく

敬遠し、益々和光同塵的神政を行つた。(抄二「総説」三乃至二八)

然るに大地の主權神たる国祖大神の威霊のぬけ出てたる天地は、奇怪なる事のみ續出し遂には神怒にふれて、エルサレム、龍宮城、エデンの園の宮殿は殆んど燒盡し、命芋々ウラル山、アーメニヤ、進走し、ウラ山上に神殿を造り、茲に神政を開いた。

此の消息を窺知したる大自在天神の從神大鷹別は、八王大神より預りたる常杵城を占領し、大自在天神を総統神と仰ぎ常杵神王と改稱し、自らは大鷹別神と名のつて盤古大神に対し無名の戰端を開いた。(抄二「九」)

此事を知つたる盤古大神は盤古神王と改稱し、常杵彦命はウラル彦神と改稱して、常杵神王に對抗した。茲に全く地上の神界は勢力二分して混沌に混沌を極め此時こそは實に天下は麻の如く乱れて如何ともする事が出来なかつた。

各山各地の八王神八頭神は今更の如く悔悟して、一日も早く天地創造の大原因たる神霊の降下して、善美の神政を樹立し給へと、国魂の宮に詣りて祈るのみであつた。大蛇、悪狐、邪鬼の悪霊は時こそ到れりと、縦横無盡に暴威を逞しうしたのである。

此の状況を蔭ながら窺ひたまひし国祖大神は、野立彦命と変名して木花姫命の鎮座ます天教山(現今の富士山)に現れたまひ、豊国姫命は野立姫命と変名してヒマラヤ山(一名地教山)に現はれ給ひ、其の神命により、木花姫命、高照姫命は正しき神々を集めて、二柱の神の神勅を宣示し給ひ、天下の神人を覚醒すべし

く、預言者として世界の各地に派遣せられた。

以上の諸神は宣傳神となつて、或は童謡に、或は音楽に、演藝にことよせて、6
神界より世界救済の爲に千辛萬苦祖の預言警告を宣傳した。然るに其の警告
の真意を研究し、日月の神恩を感謝し身魂を鍊磨せんとする神は、殆んど千中
の一にも當らなかつた。(抄ニ「モ一八、三七四」)

常古神王は預言者の言葉に聞き改心し、口ツキー山上に仮の宮を建て、日
月地神を祭祀した(抄ニ「三〇、三一」)

ウラル山の盤古神王も日の出神の宣傳歌に改心して、ウラル山上に神殿造常
の上、神霊を祭祀し、日の出神を賓客として、生神の如く尊敬した。

然るにウラル彦夫妻は改心する所なく、益々体主灵從的行動を續け、遂には神
々の迷ひを説く爲にとて、宣傳歌を造り、益んに之を四方に宣傳して、日の出神
の宣傳歌を抹殺して了つた。此れより盤古神王とウラル彦神の間には深き溝渠
が穿たれた。

ウラル彦神は五倫五常の道を忘却し、氷炭容れざる盤古神王を短兵急に攻め寄
せた。天地の大恩を悟りし盤古神王は無抵抗主義を實行し、日の出神に宥られ
て聖地エルサレムに難を逃れ、形ばかりの宮殿に天地神明を祭り、盤古神王は
総統神、日の出神は輔佐として神務と神政を復活し、世界の混乱鎮定の祈願に
餘念無かつた。(抄ニ「四四乃至四七」)

茲にウラル彦神は遂に盤古神王と自稱するに到つた。而して常古國に攻め寄

せ常古神王に帰順を迫つたが、倭盤古なる亭露頭し一言の下に要求を拒絶され
た。こゝに両軍は猛烈に戦つた。折しも連日の雨と地震の爲め、常古城は海嘯
襲来して水中に没せんとした。常古神王は大いに驚き天教山の大神を祈つて救
はれた。ウラル彦神の魔軍は大半亡び、命辛々ウラル山頂へ進走した。

四 大洪水と天津神の神政

天地變動して五百六十七日の大洪水と大地震の結果、世界の各地の山々も水
中に沈み僅に大高山を残すのみとなつた。(抄ニ「五、六」)

其時龍宮城の三重の金殿より蹶國王の神威発揚して、恰も兩刃の劍を立てた
る如き黄金の柱中空に延長し、其末端より発生したる黄金橋は此の柱を中心
東西に延長し、其少し下方より左右に銀橋を発生し、其又下方部よりは銅橋
を発生して東西に延長し地球の上を覆うたのである。宣傳神の言葉を信じた
る神々は悉く金、銀、銅橋に救はれた。盤古神王、常古神王は金橋に救はれた。
極善の神は天教山、地教山に救はれ、極悪の神はアルタイ山に救はれた。鬼
の目にも見落しか、或は宣傳神の経緯あつてか、ウラル彦神夫妻はアルタイ山
に救はれた。

今正に地上の蒼生は悉く亡びんとするとき、野立彦命、野立姫命は日の神、月
の神、大國常立尊の神霊に祈りて、天教山の噴火口に投身し給ひ以て地上の萬々

有に代りて責を負ひ、一切の蒼生草木禽獸虫魚に至るまで、残らず救はせ給うた。(妙三「七、八、一〇」)

此の変動に依りて大地はやや西南に傾斜した。此の惨状を見給ひし造化三柱の大神は、伊邪那岐尊、伊邪那美尊に命じ給ひ、天の瓊矛を賜ひて天の浮橋に立たしめ地上の海原を極きなさしめ給うた。この神業に依り数年を経て洪水滅じ、地上は再び元の陸地を現はした。

茲に造化の神の命を奉じて天の御三体の大神は、天教山の青木ヶ原に降臨し給ひ、天照大御神(撞の御柱の神)を直木柱として美斗能麻呂波比の神業を開始し給ひて、国生み、神生み(国魂の配置)、人生み、山河百の草木の神を生み成し給うた。(妙三「一〇」)

ウラル彦神は大洪水によりて改心してウラル山に帰り、アーメニヤに神都を開き、天地変動後の救ひの神として人々の尊敬深かりしが、再び邪神に憑依せられて色食の道に耽溺し、体主灵従的行動を開始するに到った。この偽盤古神王は、己一人を中心とする盤古神王唯一人此の世界の神であり、王者であり、最大權威者である。此一人を中心として総ての命令に服従せよといふ主義の大中教(ウラル教の前身)を開いた。(妙三「一一」)

此大中教は葦原の瑞穂国(地球上)に冷く擴がり渡りて、大山持神、小山持神、野槌神、茅野槌神の跋扈跳梁となり、金山彦、金山姫、火燒速男神、迦具槌神、火迦々毘野神、大宜津姫神、天の磐樟舟の神、天の鳥船神等の体主灵従的荒派

神々が、地上の各所に顯現するの大勢を顧致した。

こゝに地上の神政の司たりし神伊邪那美尊は地上神人の統御に力盡き給ひて、黄泉国に神避り給ひ、舌は益々混乱状態となり、国治立命の御神政に比して数十倍の暗黒古界となつた。天下の神人も一般の人間も救主の出現を希望する幸となつて来た。(妙三「一二」)

時に最も危げられたる人間の中より、伊邪那美大神の神業を補ひ奉るべく、野立彦命、野立姫命の神命を奉じて黄金山(聖地エルサレムの橄欖山)下に植安彦神、植安姫神二神が現れ給ひ、三五教を開設し、仁慈の神々を多く奉りて救ひの道を宣傳し正しき人間を多く救うた。されど其教は千中の一にも足らなかつた。(妙三「一三乃至一五」)

扱て日の出神に勵まされ、エルサレムの聖地に神政を復活したる真正の盤古神王は、日の出神に守られて地教山に身を隠し、後には国祖の從神、紅葉別命が盤古神王と稱して天下の形勢を觀望しつゝあつた。(オセ卷オ一章)

神日の出の神は、天教山の伊邪那岐大神、木の花姫命の神勅を奉じて古界各地に宣傳し各国魂を定め、神柱を養成する為に活動を續けられた。(オセ卷オ八卷オ九卷)

五 黄泉比良坂の戦より岩石戸開まで

一方常古神王大國彦命は又もや八頭八尾の大蛇に憑依され、常古國口ツキイロ

山に立籠り、從神廣國別廣國姫を常世神王と偽稱せしめ、自らは日の出神と僭稱し、大國姫も邪神（金毛九尾の惡狐）に憑依され畏多し。伊邪那美大神と僭稱し、天下の神人を迷はしめ、天教山の伊邪那岐、伊邪那美大神に對抗し、数多の邪神を率ゐて黄泉島へ出陳した。（一〇卷「三」）（一〇卷「五」）

天教山にまします伊邪那岐大神は、木花姫命、日の出神に應軍を言向け和す（正しき誠の言葉によつて改心せしむること）べく命じ給うた。（一〇卷「三」）

日の出神は三五教を信奉せる正しき神人（宣傳使）を引率して黄泉島に出陳し、遂に前代未聞の黄泉比良坂の神戰、鬼鬪は開かれたいのである。（八卷「三」）

神軍は天地の大神の御守りに依つて誠の言霊（神の言葉、神に通ずる言葉）を以て武器となし、又、血ぬらずして、遂に大國姫命の率ゐる黄泉軍を言向け和した。大國彦命等は改心帰順して伊邪那岐大神の命を奉じて、常世國黄泉島を根

據とし、八十禍津日の神の神業に奉仕し、大國姫命は黄泉の大神となりてあらゆる曲神を善道に立帰らしめんと努力すること、なつた。（一〇卷「三」）

神伊邪那岐大神は黄泉軍を言向けて凱旋し給ひ、黄泉國の穢を清め給ふ時に、数多の神が生れ給ひ、最後に左の御眼を洗ひて天照大御神を生ませ給ひ、大陽

界の主宰となし給ひ、次に右の御眼を洗ひ給ひて月讀尊（月夜見尊）を生み給ひて太陰界の主宰と成し、いやはては豊國姫命の身魂を神格化して神素盞鳴尊

（一名國大立尊）と名づけ、大海原の司に任じ給うた。（一〇卷「三」）
而して伊邪那岐大神は日の國の元津御座へ、伊邪那美大神は月の御國へ帰り

給うた。

さて大國彦命一派の改心の結果、之等に憑依して毒を亂したる大蛇惡狐、邪鬼の灵はウラル山アーマニヤに割據せるウラル彦一派に憑依して、以前にまさる暴動を開始するに到つた。ウラル姫命は大宜津姫神と現れてコークス山に立籠り、神殿を造営して因治立大神、金勝要大神、素盞鳴大神の神力を鎮祭し、顯國の宮と稱へ、この大神達の神力に依つて天下を統一せんと計つたのである（十一卷「三」）

斯る所に三五教の宣傳使現はれて誠の言霊を唱へ、神力を發揮したので、ウラル姫は忽ち鬼女と變じてウラル山アーマニヤ指して遁走し、残つた神々は改心帰順したのである。

然るにウラル彦ウラル姫は、美山彦をウラル彦、因照姫をウラル姫と偽稱せしめてアーマニヤの神都に残し、自らは黄泉島、常世國に渡つてアーマニヤと相侍つて回天の華業を起さんとし、古界中を荒れ廻つたのである。（二卷「三」）
又、神素盞鳴大神は地教山を後にしてコークス山に降り給ひ、顯國の宮を飯成の宮と改め、宮のあるしとあれまして、両方の劍を神実となし、因治立大神、金勝要大神を花々しく鎮祭し給ひ、天之児屋根命、太玉命をして、晝夜祭祀の道に執掌せしめ給うた。

地上は再び妖気に充され、邪気發生して草木色を失ひ、鬪争所々に起り、惡病蔓延し、復び常世の闇と一変して諸神諸人の泣き叫ぶ声は、天地に充滿するに似

至つたのである。

されど悪神はウラル山アーメニヤを死守して侮るべからざる形勢であつた。变幻出沒極まり無き魔神の活躍は日に月に猛烈となり、收拾すべからざる慘状を呈するに至つた。神素盞鳴大神は大いに之を憂ひ給ひて、母神のまします月界に還らんかとまで心を痛め給ひつゝ、あつたのである。

御父神伊邪那岐大神は

爾は何故に我が依させざる国を奪らす。且女々しく泣きつるかと。と言葉鋭く問はせ給うた。神素盞鳴大神は

「われ大神の勅を奉じ、晝夜孜孜として神政に心力を盡すと雖も、地上の悪魔盛んにして、容易に帰順せしむ可からず。到底我等の非力を以て、大海原の国を治むべきにあらず。我は是より根の堅洲国に至らむ。」

と答へ給うた。此時父伊邪那岐大神は

然らば汝が心の儘にせよ。此国には住む勿れし。

と言葉屢しく詔らせ給うた。茲に素盞鳴尊は己むを得ず、母の坐します根の堅洲国に至らむと思ほし、天教山の高天原にまします姉の大神に賤乞ひをなし、根の堅洲国に至らむと、コーカス山を立出でて天教山に上らせ給うた。(二五卷「二」)

茲に姉大神の疑を晴らすべく、玉と劍の交換の神業(誓約)を始め給ひ、天の安の河原を中に置き各々、天の眞名井に振りそゞ、佐賀美にかみて吹き棄ち給へば、素盞鳴尊の神実なる十握の劍より美はしき三柱の女神現れ給ひ、

姉大神の纏せる八尺の曲玉よりは雄々しき五柱の男神現れ給へば、茲に神素盞鳴大神の清く、若く、優しき御心現はれ、姉大神はこゝに始めて弟神の美はしき御心を覚り給ふた。

されど晴れやらぬは神素盞鳴大神に仕へまつれる八十猛の神々の心であつた。所八十猛の神の無暴なる振舞に依りて、天照大神は天の岩戸の奥深く隠れ給ひ、再び六合暗黒となり萬妖悉く起り、草の片葉に至る迄、言問ひさやぐ悪魔の古界となつたのである。

茲に高天原に坐します、思慮分別最も深き金勝毘の大神の分灵思兼神は、三五教に仕へたる教の宣傳使を天の安の河原に呼び集へて、神議りに議り、遂に進んで天教山の天の岩戸の前に現はれ、五伴男の神、八十伴男の神を始め、八百萬の神達は、天津神籬を立て、直樹を圍らし、鏡、玉、劍を飾り、出雲姫命は天の鉏女命と現はれて、岩戸の前に桶伏せて、一三三四五六七八九十の天の教歌うたひ上げ舞ひ狂ひ給ひし其の可笑しさに、八百萬の神は鬼はず吹き出し、常暗の夜の苦しき志願して、笑ひ興し給へば、天照大神も岩戸を細目に押開き給ふ折りしも、手力男の神は岩戸を開き御手を取りて引出しまつり、六合の内、再び清明に輝き渡る事を得た。

六 天の岩戸開き後

こゝに八百萬の神は此度の事變を以て神素蓋鳴尊の罪に歸し手足の爪までも抜き取りて、高天原を神遣ひに追ひ給うたのである。

一人旅、國の八十國、島の八十島にわたる、吾人を復ふ八岐大蛇の悪神や、金毛九尾の悪狐、邪気の征服に命はせ給うたのである。(一五卷「一〇」)

こゝれより大神は高天原(天教山)を降り天津神、國津神、八百萬の百の罪咎を身一つに負ひて地教山の母神、伊弉那美尊の神勅を奉じて、高國別命(天津彦根神)を伴ひ西敷に下り遂に進んで波斯國産土山のイソの高原に神館を造り青苑館と命名し給ひ、八島主命(熊野禰日神)を館の主として自らは葦原の瑞穂國(全地球)にわたる邪神を言向和さんと潜勅を開始し給ふたのである。(一五卷「三三」)

杯て國祖御神政當時天便として仕えまつりし言灵別命、常古國に再生して言依別命となり、青苑館に参向し大神の命を奉じて自轉倒島(我國)に來り給ひ、國祖大神の國武彦命と身を下して時節を待つて隠れ居ます蓮華台の辺四ツ尾山、魔に錦の宮を造営し玉照彦命、玉照姫命は神司として神灵に奉仕し給ひ、言依別命は教主となりて、三五の聖場を開き其教勢は自轉倒島は素より、遠く海外迄も及んだのである。(一五卷「九」至「三三」六卷「六」一八卷「三」一〇九卷「六」二二卷「二」)

素蓋鳴大神の八人乙女の天子姫は天照皇大神の御神勅を奉じて同大神の神殿を剣尖山の山麓、産鹽産釜の辺に造営し奉った。

こゝれが伊勢神宮宮殿の造営の嚆矢である。(一六卷「一六」「一八」)

一方ウラル彦命は常古國に渡り大國別命を擁立して、バラモン教を開設した。バラモン教の主祭神は自在天神大國彦命で其の子大國別命教主となり、遂に海を渡り亜弗利加埃及のイホの都に教を開いた。此時は三五教の宣傳使夏山彦の神力に恐れて遁走し、メソポタミアの天恩郷に根據を構へた。此處で大國別命没し其子國別彦命は鬼雲彦に追放され左守神たりし鬼雲彦が教主となった。(一五卷「二」)

折しも素蓋鳴尊の八人乙女及太玉命が現れて、言灵の神力を輝かしたので、命辛々遁走して自轉倒島に來り大江山三國ヶ岳等に立籠つたが又も八人乙女の一人英子姫や鬼彦宣傳使、自狐鬼武彦に追はれて再び波斯方面に逃げ歸り、遂には印度國(つきのくに)ハルナの都(現今のボンベイ)に立籠りバラモン教は旭日昇天の勢となつた。八岐大蛇の悪灵に憑依されたる鬼雲彦は自ら自在天神の直系なりと稱し、大國彦神又は大黒主神と稱するに到つた。(一五卷「二」「四」「一六卷「六」)

さて鬼雲彦に追放されたる大國別命の子、國別彦命は各地を漂泊して遂には印度國錫蘭島(シロの島)に渡り、國人に推戴されてサカレン王となり素蓋鳴大神の娘神君子姫を妃となして三五教を奉じて善政を施したのである。(一三六卷「一」)

自轉倒島に於ては鬼雲彦逃走後、言依別命が錦の宮を造営し三五教を開かれた事は前記の通りである。

神素蓋鳴大神はコーカス山の飯成の宮、ウブスナ山の齋苑の宮殿、自轉倒島の錦の宮等を、神教宣傳の中心地として、正しき神々を呼び集へ宣傳使を養成して、天下に派遣し四方の曲神を言向和さんと三五の神教を宣傳せしめ給うた。

15

概して大中教の後身、ウラル教はウラル彦夫妻が常暗国へ渡りバラモン教を闢いてより益々衰へてゐた。然るにウラル彦神の落胤たる常暗彦は、印度国デカタン高原のカルマタ国に根據を構へ、其勢力を次第に盛り返しバラモン教の教勢をおびやかすに到つた。

然るに神素蓋鳴大神は如何なる神策あつてか、印度国には一指もつけず他の地方のみ言向和に勤め給ひし為に思雲彦はやうやく月の国のハルナの都にバラモンの基礎を固め、大黒主と改名して印度七千餘ヶ国の刹帝利を大部分味方につけ、其の威勢は日月の如く輝き渡りつゝ、有つた。然るにウラル彦、ウラル姫の初禿に聞きたる盤古神王を主祭神とするウラル教の教徒は四方八方より何時となく集まり来りて、ウラル彦の落胤なる常暗彦を推戴して、デカタン高原の東北方に當るカルマタ国にウラル教の本城を構へ、本家分家の説を主張し、ウラル教は常暗彦の父ウラル彦の最初に開き給ひし教であり、バラモン教は常暗国に於て、才二回目に関われば、教祖は同神である。只主祭神が違つてゐるのみだ。ウラル教は如何してもバラモン教を従へぬは神慮に叶はない。先づバラモン教を帰順せしめ、一國となつて神力を西方に發揮し、次いで三五教をせん滅せむものと、ウラル教の幹部は息まきつゝ、あつたのである。

茲にバラモン教の大黒主神は此消息を耳にし、スワー一大事と鬼舂別、大足別をして一方はウラル教へ、一方は三五教へ短兵急に攻め寄せしめ、バラモン教の障害を除き、天下を統一せむと計畫をめぐらし、既にウラル教の本城へは大足

別の部隊を差し向け、三五教の中心地と聞えたる齋苑の館へは鬼舂別をして、数々の勇卒を率ゐ、進撃せしめた(四卷七)

茲に於て神素蓋鳴大神は齋苑館に正しき神人(宣傳使)を呼び集め給ひて、ハルナの都の大黒主神に憑依せし、八岐の大蛇を言向和さんと、天照大御神の御子日出別神(天之忍徳耳命)を惡兼神(議長)として神議りに議らせ給うた。(三卷三)

其結果大神の御意志通り、黄金姫清照姫の親子の宣傳使を始め、照國別、王國別、治國別の宣傳使を派遣して最後に稚姫君命の西末、初稚姫命の宣傳使も、先登の神と同様に日出別神の御許しを受けて、大黒主を言向和す為めに出発された。(三九卷「三」)

七 ハルナ言向軍

(1) 黄金姫

黄金姫(蜈蚣姫) 清照姫(黄龍姫)の二人は巡礼姿甲斐々々しく、河鹿峠の峻坂を越え(三九卷「四」ハ)進み行く途中を妨ぐるバラモン教幕下の男二人を谷底に投げ落し急坂を下り行く。

印度と波斯との国境アフガニスタンの大原野の浮木ヶ原に休息せる折リバラモン教の宣傳使大足別の引率せる軍隊と衝突し流石の母娘も衆寡敵せず、もう17

此の上は天則を破り寄せ来る武士を片端から打殺し呉れんと覚悟を極めし折柄、天地も揺ぐばかりの呻り声、森の木蔭より忽然と現れ来れる数十頭の狼は敵の集團に向つて目を怒らせ太口を開ひて墓地に襲撃する。

其早業にエール將軍は部下を纏めて雲を霞と逃げ散つた所に照國別の徒弟、國公はハム、イール、ヨセス、タールの四人を従へて邂逅したが、黄金姫の灵眼により照國別を救う為に清春山の岩窟さして進み行く。(三九卷「三」)

黄金姫、清照姫の母娘は霧こむる野辺を西南指して宣傳歌を歌ひ乍ら浮木ヶ原を進み行く。道につき当つた可なり高き山テームス山の麓にて、夫鬼熊別の部下レーブを従者と定め、テームス峠のバラモン教の春彦の守備せる関所をレーブ等の馬にて無事通過して(三九卷「七」「八」「九」)フサの国ライオン河を驛馬に身をまかして向岸に着いた時大黒主の股肱と頼む針彦、久米彦は黄金姫一行の姿に目もかけず、向岸へ渡つて了つた。

黄金姫一行は玉山峠に於て又モヤバラモン軍のランナ將軍の軍隊と衝突し、二人は進退維れ谷まつて最早運命盡きたりと覚悟の晴をかたむる折りしもあり、谷底より、ウーウーと狼の呻声聞ゆると共に幾百とも知れぬ狼軍はランナ將軍に向つて牙を刺き目を怒らして暴れ入る。其勢に僻易しランナ將軍を初め一同は、玉山峠を雪崩の如くバラウ、バツと逃げ下り行く。黄金姫、清照姫は前後に心を配り乍ら数十の狼に送られて玉山峠を宣傳歌を歌ひ乍ら悠々として下り行く。(四〇卷「一」)

黄金姫一行は茨沼の畔で照國別一行と別れレーブとカルを従へて山へくとい、ルナの国の都を指して進み行く。(四〇卷「一」)

入耶國の小都會ヨルの都へ行く途中黒い影が母娘二人を引抱へ暗に紛れ定音忍は世矢の如く姿を隠した。

入耶の都より四五里を隔てたる所の高照山の照山峠の二、三里右手に當つて狼の岩窟といふのがある。こゝには突に恐しき狼の群が天地を怪物顔に横行濶歩して人間の一步も其の地點に踏み入る輩を許さない狼窟であつた。

黄金姫、清照姫はイルナの森の少しく手前から狼の群に誘はれて、此狼の岩窟に近み入る輩となつた。(狼とは食人種の別稱)

そこに居たのは豈計らむや、三五教の宣傳使天の目一つ神夫婦であつた。ここに母娘は目一つの神(北光神)の命により狼に守られて忠臣と協力して神謀鬼策により心汚き右守神カールナンをこらしめ、イルナの国の利帝利セーラン王を救援したのである。因にハルマンの駒彦は右守の従僕としてイルナ城の岩平に影ながら盡しつゝあつた。

黄金姫は清照姫、ヤスダラ姫及びバルマンと共にハルナ城に向つて進む輩となり、レーブ、カル、テームス、龍雲は別に一隊を組織し、三五教の宣傳歌を歌つて各地を巡教しつゝ、ハルナの都を指して進み行く輩となつた。(四一巻及四二巻)

(2) 照國別

照國別は照公、梅公、國公の従者を伴ひ河鹿峠にさしか、り黄金姫、清照姫 19

一行は無礼を加へて谷底に投げ込まれたイール、ヨセフの兩人を救ひ(三九卷五七)急坂にさしか、リ倒れ居しハム、タールを因公に看病を仕し坂路を下りゆく。河鹿峠を難なく打越え清春山の山麓にさしか、る時倣に谷底に聞える女の叫び声に之を救ひ聞けば照国別の妹葛蒲であつた。葛蒲の詔により清春山のバラモン教に両親の捕はれ居ると聞き救援に向ひしか。一寸の油断により陥穿に落ち込んで了つた。其処にはせつけた弟子の因公が大神の内命により岩窟へ信者と化け込んで時を待つてゐた岩彦のヤツコスと協力して救ひ上げられ、椋谷彦、椋谷姫の両親に芽出度き対面をした。此より岩窟の留守居ホロ、レール始、ハム、ヨセフも後の罪を赦し、両親と妹葛蒲を因公に守らせ、タール、イール、ハム、ヨセフも後先を守つて、アーメニヤの故郷へ帰らしめ、自分は大神の使命を果すべく照公、梅公及岩彦を伴ひ岩窟を後にフサの国として宣傳歌を歌ひ下り勇み進んで出て、行く。(三九卷五七、一六)

照国別は岩彦、照公、梅公を従へ清春山の岩窟を立出でて西南の原野を跋涉し乍ら漸やくにしてライオン河のニミ里手前のクルシの森迄進み未たり、神徳の詔に時を移す折しもバラモン教の恩春別の部將片彦、久米彦の軍と衝突した。岩彦の金剛杖に四方八方に逃げ散りゆく。照国別は恭然自若として宣傳歌を歌ひ負傷せし敵を救つた。

岩彦は片彦の後を馬に跨りて追ひかけ、身体一面矢に刺され首を刎られんとする時五六七大神の命により不花姫命の化神時置師神が獅子の背に跨り数十頭の唐獅子を一つれて現れて之を救つた。それより岩彦は不花姫命の命により黄金姫清照姫の遭難を救ふべく只一人唐獅子に跨りライオン河を打渡り後を追う事となつた。

此時岩彦の姿は何時か間にやら透き通り、恰も鷲甲の如くになつた。佛者の所謂文珠菩薩は岩彦の宣傳便の灵である。之より岩彦は月の国を縦横無盡に獅子の助けに依りて、所々に変幻出没し、三五の神軍を危急の場合に現はれて救ひ奇事となつた。(四〇卷六、七)

照国別は岩彦の所在を失ひ彼が行方を求めて、森の小蔭や薄原隈なく探り一行は漸やくにしてテームス山を登りつめ、頂上の関所の関守の頭たりし春公の重傷を救ひ道案内として進み行く途中春公は岩彦の弟なること判明し、テームス峠を西南に降りライオン河を渡り再び道を十四五丁ばかり北にとり、玉山峠の麓にさしか、リハイと馬をいましめ秋風に吹かれ乍ら頂上まで登り行く。(四〇卷五、六、七)

一行四人は玉山峠の頂上から馬を籠り下り七八分ばかり下つて来た。倣に一匹のかなり大きな狼現れ未り谷川を導びかれ、バラモン教と黄金姫の一隊と衝突の結果、人等不省となつた十人ばかりの人を救ひ、玉山峠を下り荒野ヶ原を進み葵の沼の辺りに一泊し(四〇卷五、六、七)黄金姫清照姫と會し東西に袂を別ち、各命せられたる道を傳うて征途に登り行く。(四〇卷八、九)

照国別はバラモン軍の大足別將軍の後を追うて地教山方面に向ふ途中、葵の沼を越えテカタン國の高原の地タライ村の老婆サンヨを救ひ、且二人の娘の家出せし消息を聞いて、従者なる梅公が義執心を覺露させ、次いで同じ村の里庄ジヤンクの一入娘や、隣村のサンターと云ふ美男子の行方を搜索し救ひ出さんとする時國王の命によりて、トルマン國の首府バルガン城を守るべく義勇軍を起し、ジヤンク並に照国別一行は馬に跨り大廣原を進みゆく、梅公は唯一人列を放れてオーラ山に向ふ途中ゆくりなくもサンヨの妹娘花香の危難を救ひ、男女二人が齒の浮く様なローマンスを展開し乍らオーラ山に進み、山賊の大頭目ヨリコ姫の岩窟に突入し、詐術を以つて人を迷はせるる大杉の上の怪しき光を吹消し天狗の假声を使つて、シーゴ、玄真坊等悪黨共の肝を奪ひヨリコ姫の爲めに空に投込まれサンター、スガゴの兩人と同岩窟内で慰はず面会し、遂にヨリコ姫始め山賊を改心せしめ(六六卷)、梅公はヨリコ姫、花香を導き、照国別の隊に合すべく、オーラ山の間道を涉り、ハルの湖の岸辺に着き、波切丸に身を任せ、スガの港へ渡る途中海賊の藪妻を言霊の力に依つて追払ひ、浮島の嶺の陥没した湖の上にてスガの里の藥問屋のイルクと親しくなり神教を傳へ其館に休息した。折も折、タラハン國のタラハン市は大火災となつて猛炎が立上つてゐた。(六七卷「乃至」)

梅公(梅公別)はタラハン國の危機を救うべく、水車小屋の地底の牢獄に投ぜられたるスダルマン太子、スガール姫を救ひ祭政一致を実現して根本的に救済

したのである。(六七卷「乃至」六八卷)

デカタン高原の最も土地肥たるトルマン國はウラル教を奉じてゐた、其の王の名をガトデンと云つた。國民の過半数はウラル教を信じ一部分はバラモン教に入り、ニ三分通りはスコブツエン宗に新に入信する輩となり、其の勢は遼原を焼く火の如くであつた。

スコブツエン宗とは大黒主がトルマン國民がどうしてモバラモン教に入信しないので寵臣のキユーバに命じて築かした変名同主義の宗教であつたが、トルマン國王ガトデンマ重臣はどうしても入信しないので茲にバラモン軍の大足別が俄にトルマン城の攻撃を開始したのである。此の慘狀を救済すべく照国別は太子ケウインの軍に従つて言霊を以て應援し大勝を得たが、高姫の再生なる千草姫の爲に照国別、照公は獄に投じられたが、梅公別の神変不思議の活動によつて千草姫が仁恵令を出したので出獄しケウイン太子を中心にレール、マークをして新内局を組織し教勢の大改革を断行したのでトルマン國も小天国を現出するに至つた。千草姫は照国別の神力に恐れ何欠ともなく姿をかくした(七〇卷)トルマン國をして小天国たらしめた照国別、梅公別、照公一行はハルの湖を入江村より常磐村て舟にのつて進み行く。途中梅公別は小舟にのつて太魔の島に立寄り千草姫、妖幻坊の奸計に陥り命危きフクエ岸子の二人を救ひ照国別の後を追つた。

照国別照公はスガの港の藥問屋アリスの宅へ進み行く。

スガの山にはアリスの出資と大勢の人の真心によりて三五の大神を奉育する 24
美しい宮居は立てられた。

スガの宮に仕へるヨリコ姫は宗教問答所を設けてゐる時、千草の高姫の爲め問答に負けてスガの宮を妖玄坊、高姫に渡して了ふた。茲に於てスガの港の百方長者藥種問屋のアリスの家の奥の室にて若主人イルク老父アリス、タリヤ姫ヨリコ姫、花杵姫、門番のアル、エス及びスガの宮の神司王清別追首を鳩めて密議に耽る折りしも照国別、照公別が到着した。統いて梅公別が参会した。一同はスガ山回復の作戦計畫の準備に取りかゝり、明日を期して大擧スガ山に神軍を進むる事とした。明く此は一回はスガ山の宮につめかけた。梅公別のはからいに依りて千草姫が殺害せんとした岸子ブクエを見せられ、旧惡露見して顔色蒼白となり、唇までふるはせてゐるところに梅公別が合圖の口笛を吹けば如何しけん数千頭の猛犬現れ出で百雷の一時に轟く如き犬の声に、妖玄坊はたまり兼ねて正体を現れし、何処ともなく雲を霞と消え去つて仕舞つた。高姫は進退こ此谷まり、自衣をパツと脱ぐや否や忽ち金毛九尾白面の惡狐と還元。雲を咥び雨を起し大高山の方を目惹け雷の如く中空を馳り姿を消して仕舞つた。王清別は元の如くスガの宮の神司を勤め、タリヤ姫は大道場の司となり、ヨリコ姫、花杵姫は照国別一行と共に宣伝の旅に赴く事となつた。(七卷三〇乃至七二卷)

(3) 王國別

神素盞鳴大神の神言畏み王國別は道公、伊太公、純公を引率して齋苑の館を立出で河鹿峠を進み行く途中暴風に遇ひ峠の下り坂の中程の懷谷と云ふ南向きの、こんもりとした日当りのよい谷間へ着いた時河鹿峠に群棲する沢山の尾長猿は暴風の襲来を前知して何れも此懷谷を屈意の避難所として幾千とも知れぬ程集つて来た。伊太公は力に任して間近にやつて来た猿を押倒した。幾方とも知れない猿は四人を襲つた。四人は象寡敵せず一生懸命に正當防衛に力を盡して居る。ノソリノソリと後の方から近づいた一層大きな白毛の大猿は王國別の目のあたりをかきむしつた。王國別はアツト叫んで其の場で打倒れた。数方の猿の押寄せ来るに力盡き、今や危くなつて来た時、獅子に架つて時置師神が現れて猿群を追払つた。王國別は谷川の水で眼を洗ひ大國治立大神に祈願し完ると左の眼は見えてきた。祠の森に降り来る折りしも息春別の先鋒隊久米彦、片彦の一行と遭遇した。王國別は目を痛め激烈なる頭痛に悩んで居る爲め、あはや命は風前の燈火と云う危機一髪の際、時置師神に紛した木花姫命が獅子に跨つて現れ之を救つた。(四三卷「乃至九一」)

王國別は治國別一行と遭遇せる折柄其妻五十子姫は従者今子姫と俱にはるは齋苑館より夫の遭難を天眼に示されて夫の神業を助けんとして祠の森にいた。折しも五十子姫は國照姫命がかゝり給ひて神素盞鳴大神の神命を伝へられ

た。其御旨のまま、に神殿の造営に着手した。(四三卷「五」以下。四四卷「五」)

百日夜を経て祠の森の神殿は完成し、節分の夜に盛大なる祭典を執行した。国照姫神の命により珍彦、静子、楓、其外バラモン組六人の役員や熱心な信者に後華を托し、玉国別は道晴別(晴公)、真純彦(純公)、伊太彦、道彦(三ヶ彦)と共に河鹿峠を初春の光を浴びて下り行く(四九卷「三」)

玉国別はライオン河を渡り、廣野の中に於てバラモン教の落武者数百人に包圍された時伊太彦が敵の槍先に股をさされたので、真純彦は伊太彦を小脇にかゝるこみ逃げさせた。取残された三ヶ彦は玉国別を訪ねて行く内に、テルモン山より流れ落ちるアンブク河(聖なる河)の河辺にいた。俄にレコード破りの川風吹き来り、泥田の中に落ちて困つてゐる時、初稚姫の愛犬スマートにバラモン教の宣傳使服を届けられ、之を着用したところ、に、テルモン山の神館の主の妻、鬼国姫にめぐり会い、迎へられて、テルモン山の宮館に至り、家令の息子ワツクス陰謀の爲に今や、くつがえらんとするところを、神の守りによつて之を救済する事を得たる処へ玉国別一行は無事安着し、テルモン山の神館を平安に治め、テルモン山を下り、テルモン湖を舟にて渡る折、船底よりワツクス等が現れ、危害を加えんとする折、初稚姫は新しき舟をもつて現れ、救はれた。初稚丸に身を任せ、進み行く途中ツミ島に流された人を救ひ、續いて狸々島に於て、漁獲に出かけて暴風にあひ漂着し、るる、パールケルを救ひ、次にフクの島にて、パールケルの番頭なりしアンケルを救ひ、無事スマの浜辺に着いた。一行はアズモス山の南麓に

在るパールケルの館に着いた。パールケルの無事帰館した御社の祭典の後、三千彦の妻デピス姫が行方不明となつたので、取返す爲にバラモンの、キヨの関所のケルケルの館に玉国別一行は探しに行き、陥穽に落ちた処へ、ケルケルの一團七皆落ちた爲めに玉国別導師となり、神に祈る時、初稚姫は突然現れ、聞窟して一同を救われた。其水よりパールケルの専サーベル姫に憑依せる狸々姫の依頼により伊太彦は指揮者となり、狸々島に残された三百三十三匹の狸々の子を迎へ、帰つた。其水よりアズモス山に二棟の宮殿を造営し、玉国別有主となり、東の宮に大國常立大神、西の宮に大國彦命を鎮祭した。

サーベル姫にかゝれる狸々姫の霊の願により、天王の宮の下の岩窟にひそむタクシヤカ龍王より夜光の玉を貰ひ受けると、其の妻たるサーガ龍王は、テルモンの湖水より現れて玉国別に如意宝珠の玉を獻じた。此処に玉国別はパールケルナルケル等に主神の神教宣伝法を授けて別水を告げ、ハルナリ都を指して出発した。(五六卷「五」乃至六。卷「二」)

途中スグルマ山麓に於て伊太彦は玉国別に別水、スーラヤマに登り、初稚姫の應援を得て、ウバナナ龍王を言向和し、夜光の玉を受取つた。其水より素盞鳴大神の山上の訓を戴いた。玉国別一行に命じ、スーラヤマの海を渡り、エルの港に着き、初稚姫の三五の神の御規は唯一人道つたへ行くや、務なりけりとの教示により玉国別は真純彦を伴ひ、其の他は一人旅となり、エルサレムに向つて途中、幾多の神の試練に合ひ、乍ら進み行く。玉国別、真純彦は足を速めて、漸やくエルサレ

ムに程近き、サンカオの里に着いた。此処にはシオン山より流水落つるヨルダ
ン河が流れてゐる。其北岸をスタノ／＼やつて来る時、数十里を隔てた東方の虎
熊山が爆発した。灰煙の中を息もたえ／＼に進み行く処を初稚姫に助けられ、
マナスインナーガラシヤ一の危難を逃れて、初稚姫のお供をしてヨルダン河を
迎への舟に乗せられ、口出別命初め数百人の神司や信徒に守られ、安の河原と
稱えられたゲツセマネの園に練り行つた。

玉国別一行が龍王の三個の玉を捧持して来り、其の功績を賞する為め、特に植
安彦尊の命により、觀迎会が開かれた。

そしてコーカス山よりは、言依別の神が数多の神司を引率し、二、三日前に早
くも聖地に到着され居た。玉国別、真純彦、治道居士、三千彦、伊太彦、デ
ビス姫、ブラウーダ姫其外の人々は集まり来たりて、七福神の姿となつて、彌
茲に七福神室の入船の奉祝神劇は演ぜられた。

此の時は玉照彦命、玉照姫命の御婚禮で九月八日の吉日であつた。(六三卷至六五卷)

(4) 治国別

治国別は萬公、晴公、五三公の三人の件を従ひつゝ、河鹿峠の頂上に於て齋苑
館に攻め登る大黒主の軍隊を言霊の力によりて追ひ散らし、玉国別と会ひ、祠
の森にて計らずも弟の松彦と名のり合ひ(四三卷)以下、茲に五十三子姫に國照

姫命か、リ玉ひて「治国別、玉国別の神司、バラモン教の思春別が黄金山へ軍
隊を引率し進撃する件に關し去就に迷うて居る様だが、我々今神素盞鳴大神の
御心を体して汝に一切を宣り傳ふべし。此川より治国別は万公、晴公、五三公

進めよ。思春別の軍隊は未だ遠くは行かじ。今追跡せば或は途中にて喰止め得
んやも計り難し。又玉国別は此処に國祖大神、豊国姫命の御舎を造り且つ教の
庭を立て並べ磯の館の咽喉たるべき河鹿峠を守るべし。サア明日より森の樹を
伐採し土引きならし建築に従事せよ。

早くも磯の館よりは、大工、左官、手伝石工など此方に向つて急ぎ来る途中で
ある。玉国別は此処に留まつて眼の養生を致さぬよ。

又五十三子姫は今子姫と夫の眼病全治する迄留まつて介抱すべしとの大神の
御宣示である。我は此川にて汝に宣へ伝ふる事なし。

と示されるまゝ、治国別一行は急坂を下りゆく。(四三卷)以下至(四四卷)
治国別一行は老樹うつそうつたる河鹿山の筋麓山口の森に黄昏時漸く到着し、
大山祇神の社殿の跡に一夜をあかし、徒弟晴公が妹楓、珍彦、静子の両親と不思議
の面会をなし、治国別は晴公一行四人を山口まで見送つた。四人は玉国別に
面会し、神殿造営の手伝ひをなし、遂に天婦は宮のお給仕役となつた。(四三卷)至(四五卷)

治国別は松彦、五三公、万公を野中の森に置き去りにして龍公一人を伴ひ、神

の命を奉じて浮木の里に在せしランケ片彦將軍の陣營に進み入り、其奸計に陥り、其灵魂は神の御許しを受けて中有界を始とし、オニオニオ一の天国及び灵國を巡覽し、中有界に於て伊吹戸主神の教訓を頂いて息を吹き返すと治國別、龍公の身はアークタールに救はれ、浮木の森の陣營のランケ將軍が居間に横たはつて居た。治國別は遂にランケ、片彦將軍を言向和した。(四七卷乃至四八卷)

治國別に置き去りにされた松彦一行は素盞鳴尊の神遣ひの頃波斯國北山村にて大気津姫(ウラル姫)の娘高姫の聞きたるウラナイ教の流水をくみし小北山に進み之を帰順せしめて浮木の森にて治國別に合流した。(四九卷乃至五〇卷「ホ」)

治國別は其れよりビクトリヤ王家が右岸ベルツの叛逆と鬼春別、久米彦の引ゆるバラモン軍の爲めに滅亡せんとする処を神素盞鳴命の神命によりて救護し、三五教の大神を祭り後継者を定めビクトリヤ國をして、ミロクの聖代を現出せしめた。(五三卷乃至五四卷「ロ」)

(5) 初 稚 姫

初稚姫はハルナの都に蟠まる大黒主の身魂を救ひ、天下の害を除かん爲め神素盞鳴大神命を奉じ、百余日空助(父)の宅に奥深く潜みて神の教をよく調べ、黄金姫、清照姫、照國別、玉國別、治國別におくられて、神素盞鳴大神の大前に伺候し、八島主神の教示を受けて只一人征途にのぼることとなつた。途中河鹿峠に於て妖玄坊の变化たる空助を名破し、灵犬スマートをつれて祠の森の神殿を占領せる高姫、妖玄坊を時を待つて追ひ攘ひ、三五教に帰順したる小北山に立寄り松姫と語り、妖玄坊の曲輪によりて現われたる震免禰的の曲輪城の秘密をあばき、迷ひし人々に直理を説き諭し、スマートを従へ、宣傳歌を歌ひながら西南に別川行く。(四九卷「ハ」)

鬼國姫を助け、又テルモン湖上に於て賊に会ひて苦しめる玉國別一行を新舟(初稚丸)にて救ひ、ついでキヨの關所の隔穿におちて命危き玉國別一行とケルテル等を窟を開いて救ひ出した。

其れより伊太彦がスーラヤマ山のウバナンタ龍王より夜光の玉を受取る時、其神業を補ひ、玉國別一行に宣伝使は一人旅との教示をみたえ、虎熊山の爆発の際、其山に住み居しマナスイン龍王が、玉國別、直稚彦に危害を加えんとする時之を救ひ種々と重大なる教訓を興へエルサレムの聖地(黄金山)へ導き玉國別の一

行をして七福神の樂遊びの神劇に参初せしめられたのである。(五六卷「五」乃至五八卷「七」七「六」三卷「四」乃至「六」三「六」以下)

以上の如く宣伝使達は主の神の神徳を輝かしつゝ、神を力に誠を杖に神より授け給ひし言霊を以て唯一の武器となし、宣伝歌の徳に依つて総ての神人も悪神をも善道に救ひ、野立彦命の代神、埴安彦命の現れませる黄金山々麓の聖地エルサレムに参拜し三五の神教を伝へ乍らハルナの都へ迫つたのである。

(6) 結 論

既刊の灵界物語(オ一卷乃至七十三卷)には略右の如く、三つの神系の活動について述べてあります。

其の後は未発表の爲め如何になるか詳細は判りませんが、オ一卷の序文や既刊の物語中各所に述べてある所を綜合しますと結論は神素盞鳴大神が教刃の三五教の宣伝使を引連れ、ハルナの都に迫り給ふと大黒主は再び牧園に逃が来り出雲の大山にひそむ時、大神は自ら教刃の天使や宣伝使を率いて安く来りまし神力を發揮して八岐の大蛇や邪神愚狐の灵魂を言句和し、終に出雲の日の側上^{かみかみ}に於て叢雲の空剣を得給ひ之を天祖天照大御神に献上して至誠を天地に表はし給ひ、五六七神政を成就し松の代を建設し、因祖をして地上灵界の主宰神たらしめ天下萬民の災害を除き救世の大道を樹立し給ひし長大なる太古の神代

の物語の大意を發表される事になつてゐる事は明白であります。(「オ」序二頁「三七」序二頁「三九」卷総説一頁「四二」卷序二頁「五五」卷序二頁)。

(以上)

◎ 註

以上の神系表説明書はオ二次大本事件の証據として提出したものでありまして昭和十三年の秋頃に第一稿なり、昭和十四年証據として京野地方裁判所へ提出したものでありまして昭和十六年大阪控訴院に更に神系表に丁寧なる説明書を一つつけて提出致しました。因に本書の基本となる灵界物語三神系時代別活動表は昭和十七年八月七日未次より聖師様がお歸りになりました秋頃お目にかけますと「あ、これは王仁が書いたのか」と耳誤りなきを証明して頂いたものであります。

而し乍ら本書は灵界物語の真理の上から見ますと神龍の片鱗にも及ばない一つの研鑽資料であることを申し上げて置きます。皆様に参考となる矣は皆聖師様のお徳であり若し誤りあれば編者の不徳であります。

本稿は灵界物語を赤子心になつて文字のみを拜讀して歴史論(時局論)に編

んだものであります。何卒此の書を讀まれた人達は進んで灵界物語を拜讀熟讀
さ水まして神理を体得さ水むことをお願申し上げます。

昭和二十七年一月十五日

編者 木庭 次守 謹言